

UrbanDesignLab. Magazine

2015.08.31 vol. 232



キャンパスを訪ねよう

L E T ' S V I S I T T H E C A M P U S

東京大学
工学部都市工学科／
工学系研究科都市工学専攻
都市デザイン研究室

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/>

- 🌻 キャンパス計画室インタビュー p.2
- 🌻 明治産業革命遺産記事 p.10
- 🌻 コンペ特集 p.12

今月の編集担当：王 誠凱 黒本 剛史
編集長： 今川 高嶺
編集委員：中島 健太郎 高橋 舜 中井 雄太 黒本 剛史
砂塚 大河 富田 晃史 王 誠凱



**東京大学
キャンパス計画室に迫る！！**



キャンパスを計画する
とはどういうことか？
そしてそのやりがいと
面白さとは？

独立と融合

協力・共闘する

キャンパス空間計画

キャンパス計画の特徴は、それぞれの部局が独立して意思決定すること。見えない線が引かれている。工学部は、工学部の敷地を自分のものだと思っている。管理上の責任の範囲でもある。独立した部局をいかにコントロールするかが難しくユニークである。

一方、地権者のばらばらな普通の都市計画に比べると、1敷地でやれて自由。接道義務なしに建物を建てられる。ばらばらといえど所有者は東大として一つなので、たとえばスクラッチタイルのような雰囲気ですべてをつくろう、といえは従ってくれる。それは大学ならではのものの。

ルールのない時に安田講堂より高い建物が建ってしまったが、今後そういうことをやめようといえ、大変だがみんな守る努力をしてくれる。

(西村キャンパス計画室室長)



「大学」のプランニング、キャンパス計画室

Planning of the "University", Campus Planning Office

今月号は大学の空間をデザイン・計画するキャンパス計画室の仕事についてご紹介します。西村先生が室長を務めているということでお話を伺いました。非常に内容の濃いインタビューとなり、どれもこれも面白い話ばかりです。キャンパス計画という仕事の奥深さに感心する一方で、あらためて空間を対象とする計画・デザイン学の魅力を実感しました。(編集：王)

受け継がれるプロジェクト、そして仲間と自分の居場所

一学生時代のキャンパスライフを振り返り、先生の思い出とは一

王：先生が学生時代に東大で一番好きだった場所、思い出のある場所はありますか？

西村：当時は駒場キャンパスが苦手で、空間がダメだったというよりも、僕は九州から出てきたからほとんど友人がいなくて、大学の雰囲気になじめなかったね。東京の学生が多いからそういう雰囲気が漂っていて、田舎者だと疎外されてついていけない印象を受けたね。その記憶が大学のキャンパスの印象と重なっていて、今でも駒場に行くにあんまりいい感じがしないね。

それと比べると本郷に来てからは、皆さんのように色々なプロジェクトをやり始めて、仲間ができた。すると自分の居場所が実感できて、非常に居心地がよくなった。どこが好きかと言われても、僕らの時は工学部8号館(②)にいたので……。今都市工のある工学部14号館(③)の場所は、当時テニスコートがあったんだよね。だから状況は全然違うんだけど、一号館の前に広場があるじゃない？あそこは常に通っていたから印象に残ってるね。そこは昔から大分変わったけどね。前は通路の周りが全部つつじに覆われて

たからどこにも行けなくて、変えたいと思っていたら、今は開けた感じに変わって良くなったね。

工学部1号館が真ん中であって、それに突き当たる軸があって、その雰囲気は変わってない。学生は変わるけど、空間としては変わってないところがある。こうして空間にいるんな時代の人が思い出を持っていて、そして蓄積されていくんだろうと思うね。

黒本：やはり工学部前広場に一番思い出があるということですか？

西村：毎日通っていたからね。

キャンパス計画室とは、精密な空間計画を練り上げるための実務者集団

一キャンパス計画室の経緯と現在

王：キャンパス計画室が大学の一部署として設立された経緯についてご存知ですか？

西村：僕も歴史そのものはよく知らないね。ただ、僕の先生だった渡邊定夫先生もキャンパス計画室だった。キャンパス計画室には助手や助教授のポストがあったりして、その助手ポストを今、森さんがやっているわけだけど、昔はそこで設計などの具体的な作業もやっていて、実際にキャンパスを作っていく実務者集団というのが最初だと思う。

今では具体的な計画が出来上がった後に、どういう形でマネジメントするのか考えたり、新しく建つものをチェックしたりする。全部デザインしていた以前からは性格が変わってきたと思う。

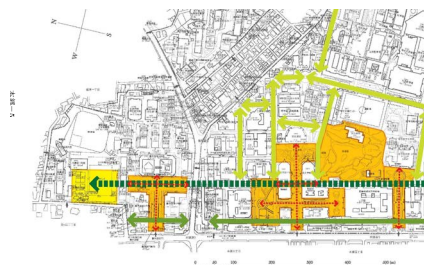
1960年代後半に東大紛争があって、その頃の大学は自治を主張して、政治的にリベラルで活発だったので、時の政権は大学にあんまりお金を入れてなかったですね。だって、執政者に反対する所にわざわざお金いれないでしょ。だから、大学にお金のない時代が80年代ごろまで、結構長く続いていた。キャンパスにお金投資されなくなって、すごく疲弊していたんですね。その分あんまり建物が建たなかったの、昔のものが残っていた良さもあるんだけど、設備的には良くなかった。

た。

ところが、そこから少しずつ教育にお金を投資しないといけないということになって、建物が少しずつ建ち始めて、少し上向きになったわけだ。

2004年に大学が独立行政法人化すると、それまでは土地も国有地で我々も国家公務員だったものが、土地は大学のもので、我々の身分も国立大学法人に所属しているということになった。

そこで大学をもっと活性化させたいというので、それまで国立としてはやれなかったことをやっていくことになった。例えば工学部だと、企業とのジョイントとかが自由になって、東大にとって競争力アップにつながったが、一つ問題が起きた。お金を寄付とか共同研究とかから持って来れば、自分たちの建物が自由に建てられるようになって、色々な建物が新しく建ったわけだ。それがあんまりコントロールなく建ってしまい、これではまずいとバブル以後から言われるようになった。それでキャンパス計画をきちんとやって、お金さえあれば自由に建てられる事態を阻止しようということになったんですね。その方針は前の代の内藤廣先生の時からはっきり打ち出されて、今ではクオリティやデザインも厳しくチェックすることになったわけだ。キャンパス計画のための組織を持つて国立大学はそれなりにあると思うけど、これだけきちんとやっている所は東大が一番だと思う。



▲ キャンパス計画総覧のマスタープラン図
(東京大学キャンパス計画総覧より)

これが『キャンパス計画総覧』。いろんなプランが描かれているルール集で、私の担当になってからまとめ直した。マスタープランとか、ゾーニングとかが書いてある。キャンパスも柏に駒場、本郷を網羅していて、それぞ



▲ お馴染みの工学部1号館(①)前の広場



▲ 本郷キャンパスマップ (図中の数字は本文に対応している) (東京大学 HP より作成)

れのキャンパスに合わせた計画作りをきちんとやっている。どういう空間をつくったらいのかをそれぞれ考えて、一番重要なところから順番にゾーニングしたんだね。

プロジェクトの構想段階や事業段階ごとに、何をどこまでチェックするのかも考えている。一番重要なものは総長がチェックするんだけど、誰が見るかのレベルをきめて、手続きをきめて、この総覧にのっとって実行する。いろんなことを精密にやっているんだ。

一キャンパス計画の仕事内容、チェックと提言からなる審査機能

黒本 : 個別の事案が出てきた時に、いちど全部キャンパス計画室が受けて、どこまで上に話を持っていか決めていく形ですか？

西村 : うん、重要性によって決めていく。しかも、構想段階と具体的なデザイン段階に分けて、二段階でやっている。

黒本 : そうなると、扱う案件がかなり多いのでは？

西村 : すごく多いよ、毎月一回キャンパス計画室会議を開いていて、その準備は毎週一回位ある。今日の午前中にも、その準備があった。大きな計画案件や将来的な案件から、細かい案件までたくさんある。例えば、安田講堂周りに建物の案内サインがあるんだけど、公的なものがなくて、みな立て看板みたいなんだよね。ちょっとあれは汚らしいじゃないかということで、案内サインを統一しようという話になった。デザインをどうするかとか、そういう細かい案件までやっている。面白い

けど大変だ。

王 : キャンパス計画室のチェック機能が最も重要だとすると、例えば、発注や施工などがすでに実施されている案件で、このままだとまずいと気づいた時に、ストップをかけるような仕事もしますか？

西村 : それは日々やっているね。ただ、具体的に事業が契約されて動き出すと、事業者と細かいやりとりするようになって、それはそれで担当の先生がいて役割分担している。今は野城副学長さんだけれども。キャンパス計画室は、計画段階を主に管理、担当している。

東大の歴史を紡いできた総合図書館に新たな空間演出を！

一増え続ける図書に対して空間を再構築し、巨大な地下書庫が誕生？！

黒本 : 総合図書館 (④) で工事をやっていると思うんですが、地下を掘って大きな書庫をつくるという結構な大工事だと思いますが、キャンパス計画室として苦労したことはありますか？調整が大変だったとか。

西村 : いくつかあるが、そもそも無限に増えていく図書をどういう風に扱っていくのか、どこの大学にとっても大問題だね。現状は文系の図書が部屋中に溢れかえっている状況で、スペースがどんどんなくなってしまう。

ところで、いま理系の本は全部柏の自動化書庫にあるのね。だから柏から取り出して本郷まで送っているわけで、でも文系の先生は

その距離にどうも耐えられなくて、本が近くにないといけない。本が一番大事なソースだから。そうすると、本郷キャンパスの中で図書館を作るのかとういこと、増築がなかなか難しい。いまの図書館はすでにずっと増築してきたもので、これ以上は建てるスペースがなくなっているわけだ。

内藤先生の時代に、この図書館の前の広場 (⑤) を掘って、地下に 300 万冊入れられるじゃないかという計画が作られた。実現すれば、それぞれの研究室の本をそこに収容できるので、スペースが生まれて、もっといろんな活動ができるということでスタートした。つまり組織の大きな変更も含めた、文系の研究環境の改善ということでスタートした。地下に書庫をつくるとすごくお金がかかるのだけど、地上で大きな物をつくるのも難しいということで、そういう決断をした。

一施工段階の問題解決、歴史保存と空間創出

まず、溢れる本をどうするのか、本郷キャンパス内で合意形成するのがすごく難しかったよね。もう一つは、計画を立てて実際に工事を始めると、いろんな問題がおきてくるわけだね。例えば、図書館前の噴水脇に 2 本の大きなクスノキがあって、愛されていたので、保存の意見が強く出てきたわけです。クスノキがペアであるのが安田講堂前とここにしかないんだよね。でも書庫を作るには、図書館前の地下を掘ってクスノキを移植するしかない。

どこに移植したかという、赤門から入った突き当たりで、医学部の本館と言われている医学部2号館(⑥)の両側に移植したわけだ。ペアで置ける場所が他になくてここに置いたら、すごい反対があった。図書館前にあるクスノキを含めて風景なのに、なんでそんなことをやるのかとか。特に文学部の先生方の反対が強かった。やはり変化をしようとする、反対もあるわけだね。



▲ 施工前の図書館前(新図書館計画より)

図書館前にあった噴水も、どうするかを議論した。図書館前には全然違う形で広場をつくる原案があったんだけど、噴水をもとに戻すように計画を変更した。噴水のまわりに水が溜まっていたでしょ。実はあれは深さ10m位の巨大な水槽だったの。なぜかというと、関東大震災の時に図書館が焼けたので、防火水槽が必要ということになった。これは図書館を守るための水槽なんだよね。単なるデザインじゃないわけ。ものすごく大きな防火水槽だから、残す案も考えていたんだけど、スペースが全然足りなくなるので断念した。ただ、ここに水があったのはやはりひとつの歴史だから、薄い水を張ろうということになった。以前と同じような水煙の相輪(写真を参照)の形をした塔から水がでて、アクリル板の上に水を流すことにした。それを地下一階から見ると、アクリル板からドーナツ



▲ アカデミック・コモンズと地下のパース(新図書館計画公式ウェブサイトより)

状に明かりが取れて、その上に水が流れる感じになるのです。

図書館前の地下一階は、アカデミック・コモンズという勉強スペースになる。いまの図書館の中では、議論するような、声を出すスペースがなくて、静かにしないといけないでしょ。静かに勉強する人は図書館の中でいいんだけど。だから地下一階にはテーブルを置いて、学生が自由にいろんな議論できるようにした。両側にちょっとしたサンクンガーデンがあったでしょ、そのサンクンガーデンから地下に入る。だから地下一階は、学生が大勢溜まっていつでも議論できて、なおかつその明かりが上からきて、その下に三層の書庫があるという構造。

デザインのことでなかなか苦労もしたし、ここ全体が埋蔵文化財の包蔵地なので、こういう工事をやるときは埋蔵文化財の調査をやらなければならない。そうすると、なんと前の図書館の土台がでてきたんだよね。明治30年の土台で、それがすごく話題になった。防火水槽をつくった時も、これを壊さないようにつくっていた。こちら辺全部そうなんです、ちょっと掘ると、もう赤煉瓦だらけです。前震災で壊れた瓦礫を埋めてあるから。出てきた土台をある程度生かしながら、噴水をつくって、ちょっと高くして、その周りにベンチを置こうと。そうすると、この前にこういう建物があったことがわかる。歴史がこうやって重なる。

黒本: この図書館の完成はいつ頃になるでしょうか?

西村: 地下書庫は2年後に完成する予定。予算が毎年決まるので、図書館はすこしずつ耐震改修をやっていて、いつ終わるの読めないところはあるよね。今は二期目が始まるところで、一期2年ずつかかるすると、あと三期残ってるから6年のはかかるでしょう。皆さんが卒業したあとになるね。中もすごく良くなる予定です。図書館に入ると正面に中央階段があるじゃない? その奥の閉架書庫を今後開架書庫にするので、中に自由に入れるようになります。あとは、閲覧室周りにある開架書庫を移して、正面の窓側から両側のウイングにかけて全部閲覧室にしよう。だから閲覧室がコの字型にあって、大きな階段があって、内側が全部開架書庫というようになる。閲覧室からずっと開架書庫へ行けて、すごく開放的な感じになると思う。

各キャンパスを繋ぎとめる基本軸、フレームワークから読み解く計画意図

—「緑の軸」を根幹とした長期計画、キャンパスをつなぐデザインとは

今川: 南北軸(⑦)に道がずっと通っていますが、これを弥生キャンパスまで一本で通れるように整備しようとしていると聞きました。どんな理念に基づいて両キャンパスをつなげるのですか?

西村: 緑の大きな軸が通っていて、そこに大きなオープンスペースがくっつくというのが現在の計画の根幹。それを受け継ごうということで法文1・2号館(⑧)をアーケードにしている。言問通り(⑨)の所でも、以前は門を出てまっすぐ行けた。言問通りが拡幅した時に坂道の勾配を変えたもんだから、緑の軸上の言問通り・キャンパス間に高低差ができてしまった。しかも本郷キャンパス側に水槽ができたので、それを越えるためにブリッジをかけた。将来的には本郷側の建物を壊して大きなオープンスペースにして、ゆるやかなスロープで弥生までずっとつながっていく。それが長期計画。

今川: そのへんの計画は動いて、生きていますか?

西村: プランには書いてあるんだよね。その意味では長期計画として生きている。その計画は岸田日出刀案だし、内田先生の頃からのプランでもある。だから計画を尊重して、そのまま実行することになっている。

今川: 今年農学部からきた森下くんは本郷キャンパスをあまり知らなくて、ローソンがあることすら知りませんでした。弥生キャンパスとつなぐ計画が動くと、状況が変わってくると思います。

黒本: 確かに、授業で農学部に行くことには遠くて少し抵抗があります。

西村: スロープにして、自転車や車椅子でも弥生キャンパスに移動できるようにしておくと、防災上もよい。担架で行き来できることが重要じゃないか。本郷キャンパスは防災拠点でもあるので、集まった時にスペースが必要。人を流すときに今の階段だと危ないので、スロープ化したいと思っている。まあ、もう少し先の話だね。

黒本: 医学部1号館(⑩)も軸が通っていますが?

西村: もともとは、医学部1号館を壊すという計画になっているわけ。ただ、それを壊す

のが良いかどうか、クエスチョンになっている。

僕としては、間にある道(⑪)も実は重要だと思う。東大になる以前には前田の伯爵邸の洋館があって、そこに至るメインアプローチの両側を形成していた。だからこのまま、以前のメインアプローチを生かす方針で行きたいと考えている。緑の軸からは少しずつれているが、懐徳館(⑫)が重要文化財になっているので、それを生かすためには軸から曲がって入るのが大事だと思う。最初の計画とは変わって軸が曲がってもいいかどうか、今後の議論だね。

安田講堂からみる東京大学の景観問題

一背景の景観問題、東京全体の景観価値から東大内部の背景問題まで

王：安田講堂(⑬)の大きな改修工事が終わりましたが、安田講堂の風景は正門から入ったときのシンボルです。後ろに立っている大学外のビルに関しては、景観としてよくありませんが、大学の一部署としてのキャンパス計画室は、建てて欲しくないといった助言やストップをかけることはできますか？

西村：学外でストップをかけるのは大学でなく、区や都の仕事なんだよね。都にとっては、視点場から見た背景の保全是、丸の内からの東京駅や青山通りからの絵画館で実際にやっている。内堀通りから迎賓館をみた後ろ、国会議事堂の前から見た後ろなど。だから、東

大周辺でもあり得ない話ではないだろう。東大内の景観だけだということエゴといわれるんだけど、東京全体の景観価値の一要素として考えられたら、いえないこともないと思うんだけど。ルールをつくって背景を守めることは都市デザインのレベルで都とか区ができることだよ。ただ東大が外に対して言うのは難しい。

でも、少なくとも東大の中の建物くらいやらなければいけないね。すぐ後ろに理学部1号館(⑭)が建っているけども、安田講堂より高いのを建てちゃいかんよねえ。あれも、大学民営化のときにフリーになった頃の現れ。自由に建てられてしまった反省から、これからはキャンパス計画をやらなきゃいけないってこと。

黒本：その当時のキャンパス計画室は、ものをいう力がなかったということですか？

西村：残念ながら、そういうこと。

一伝統を守りつつも新たな創造を！ 安田講堂改修に求めるものとそのこだわり

王：安田講堂の中の改修工事について、キャンパス計画室はどのように関わりましたか？

西村：キャンパス計画室の中で、建築学科の千葉学先生に担当になってもらい、細かくみていただくことになった。千葉先生は(安田講堂の改修計画の実務を担当した)香山寿夫先生のお弟子さんなので、自分の先生の事務所の仕事に文句をつけるという難しい立場

だったが、たいへん色々やっていたいただいた。

たとえば、サッシやタイルをどうするか、プランや天井のリデザインとか。いろいろ工夫された。責任者が担当して、その要所要所でキャンパス計画室が報告を受けて、議論するという体制でした。細い事案がたくさんあるから、誰かが本気にならないとできない仕事なんだよね。

この改修は『新建築』の巻頭に載ったけども、新建築の巻頭にリノベーション、保存プロジェクトが載ったのは東京駅以来らしいんだよね。「新」建築というくらいだから(笑)、リノベーションはなかなか載らない。それくらいの評価をしてくれたってことだね。重要文化財でもないのに。ちなみに今安田講堂は、重要文化財指定に向けて動いている。

黒本：重要文化財になると、維持管理で補助金が得られるといったメリットがあるのですか？

西村：維持管理ではないが、修理に補助がある。そのかわり変更の許可が必要になる。

黒本：卒業式のときに、光の取り入れ方が新しいという話があった。

西村：内田先生が岸田先生かの発案で、自然光を入れることが大きなテーマになっている。卒業式の時に安田講堂については話したが、実は図書館もそう。3階の階段上にある広いロビーには、上のトップライトから光が入ることになっているが、今はふさいで部屋にしまっている。こんどの改修では部屋をとって、もう一度光を入れようとしている。今暗い3階が明るくなって、そうすると雰囲気



▲ マガジン編集部が西村先生にキャンパス計画のお仕事について伺う

気が変わってくる。このように、自然光をいかに入れるかがデザインの要になっている。

光といえば、安田講堂内部の両側にライトウェルがある。平面図をよく見ないとわからないが、円形になっている舞台袖に2つのライトウェルがある。安田講堂はユニークで、表のグラントレベルは後ろからみると3階なんだよね。その下の階は事務室になっていて、ライトウェルがちょうど下の階の会議室の明かりになっている。なおかつ、プロセニウムアーチと演台があって、演台の両脇に縦長の窓があって、それがライトウェルからの明かり窓になっている。舞台の横から自然光が入ってくるという、なかなかないデザイン。改修前はダクトになっていて、室外機などが塞いで暗くなっていたが、今回の改修で室外機を屋上に持って行ってきれいにした。それがけっこう大きな変更。

あと安田講堂ですごく面白いと思ったのは、演台にあがる階段だね。普通のホールだとステージの脇から上がっていく。ところが安田講堂ではステージ脇だけでなくもう一組、演台のすぐ横に階段があるわけ。前から不思議だと思ってたのね。今年の卒業式が久しぶりで安田講堂で行われ、私も先端研所長として壇上に居たので、ああなるほど、こう使うんだ！とわかった。総長が卒業証書を渡すときに、演台前の広いオープンスペースで学生が順番待ちをして、演台脇の階段を上がって卒業証書を受け取って、また演台脇の階段で下っていく。これが作り付けになっているんだから、完全に卒業式をスムーズにするための空間になっていて、それ以外はあまり考えていないということがわかった。今年壇上から眺めて初めて、なるほどこう使うのかとわかった。僕のときは入学式も卒業式もなく、倉庫になっていくくらいだから。

それまで東大には、集まってセレモニーをやるスペースがなかった。図書館の中で卒業式などをやってたんだよね。安田善次郎が大講堂を寄付してくれたが、寄付をお願いする際の殺し文句は卒業式ができるように、また天皇陛下が卒業式にきて休むところもないから欲しい、ということだった。4階に天皇のお休みになる便殿（びんでん）というところがある。それが大きな寄付の目的だった。

黒本：実際に天皇が来たことはありますか？

西村：戦前にはあったと聞いている。

黒本：改修によって席が減らされていて1100になっていて、卒業式には足りていませんが？

西村：改修前でも1700で、もともと足り



▲ 改修後の安田講堂（東京大学基金より）

ていなかった。だから卒業式には早く行かないと入れない。

残された問題、これからのキャンパス計画

一浅野地区と二食周辺の空間改善

黒本：現在キャンパスの中で問題視しているところはあるですか？先ほど、農学部の話がありましたが、ほかには？

西村：まずドーバー海峡（言問通り）のデッキのほかに、やりたいなあと思ってやれていないのが、本郷第二食堂（二食）（⑮）周辺の改善。二食は片側のウィングしかできあがっていない。それを完成させ、裏まで改善する。今プレハブなどが建っているの。現在の環境安全研究センターのところに今は使われていない門（⑯）があって、これを使うと根津の駅まで弥生門から行くよりも断然、100mほど近くなる。これは必ず使われるよね。このへんに学生の色々なユーティリティースペースをつくるとすごく良くなるのよ。安田講堂もすぐ近いし。こういうのが計画としては出ているが、申請金がない状態。せっかく夢を広げてるんだけどねえ。

王：これは、駅が近くなるから使われそう。

西村：途中には浅野キャンパスの東からの入り口（⑰）もある。現在人通りの少ない通りで静かなところなんだ。現在は、ごちゃごちゃとして、つながっている感じがしない。二食裏に門をつくれば、まっすぐつながって、使い勝手がよくなるよね。

浅野地区をどう変えていくか。南側から考えるとなかなか思いつかないが、東側から、

低くて緑の多い方から変えていくと色々できそうでしょ。まあどうなるかわかりません。面白いでしょう？夢は広がる！

浅野キャンパスの中に職員宿舎がある。ここは教職員住宅として働く女性向けにでもしたほうがいいと思う。子育てしやすくなる。もっとも近く、ここに保育園でもつくれば、大学全体としてはいいと思う。浅野の中心部は建て込んでいるので、どうすればいいかは課題。原子炉もある。

黒本：「新建築」によると、安田講堂裏のATM周辺（⑱）の改善も検討されてますね。

西村：できればATMを二食周辺改善の際に移したいが、安田講堂裏をきれいにするためには行き先が必要だ。いま、理学部1号館の建設工事3期部分が更地で、もうすぐ建つ。その南には、化学東館との間に三角形のスペース（⑲）があって、ここを生かしたいと思ってるのね。

なぜ三角形の変なスペースがあるかということ、南側からの軸線（⑳）が東大のももとの軸なの。ももとのメインのエントランスは竜岡門の近くだった。その軸を伸ばして病院ができて、徐々に広がっていった。ある時期に正門ができて、本郷通りから入るようになったのね。理学部1号館（㉑）はこちらの軸でつくられている。このふたつの軸のずれを解消するための三角形なんですね。この三角形ができると軸がずれて、この軸のずれを受けるために二食を円形にして、ウィングを少しずらした。ウィングの中心は、この軸と完全に一致している。すごくうまい。軸がずれているときに、円を使って回収した。

クリストファー・レンという建築家が、ロンドンのハイドパークからの道とオックス

フォード通りと交差させるのに、両者の軸線のずれを吸収するために、オールソールズ教会という円形の教会を建てた。クリストファー・レンがつくった教会なんだけど、違う軸をうまくすりつけるために円弧で結んだんだよね。二食の所でも似た解決方法を使って、大したもんだと思う。

二食の建物もよく見るといいもので、階段室の先の3階は音楽室になってて、昔はコンサートホール、ダンスホールだったかな。今はオーケストラの稽古場所になってるね。地下はプールになっている。ああいうところを改善すると面白いと思っている。それが夢です。たぶんだめだろうけど。(笑)

二食周辺の改善が実現して門をつくると、不忍池まですぐになる。こういうのは都市デザイン的で、夢が広がる。この三角形も、実はそういう歴史的な意味を持っている。

王：基本的に軸に沿っている建物はその方向にそって作られていますが、二食にきて隙間は大きくなっていると同時に、二つの軸が交差する場所が二食になっています。円形のデザインはうまいと思いました。

西村：クリストファー・レンの反転版をやったのだとわかって、この場所が大切だと気付いた。今後の整備方針としては、片方のウィングをつくる。今バス停があるが、再開発すれば他の場所にバスをおけるわけだから、今ある大きいロータリーを改善できる。

一三四郎池周辺の回遊性向上と眺望景観の創出

西村：あとは、三四郎池(⑩)をもっと回遊できるように活性化したい。今はこんもりしすぎて怖いね。もう少し木を減らして明るくしたいと思うんだけど、植物の先生が反対するのでどこまで手を入れて良いか、議論を始めているところ。池のなかには加賀藩の屋敷時代からの原型をとどめている部分があって、あと昔は築山があって、そこから眺める景色が代表的だった。

富田：三四郎池のメインのゲートはありますか？

西村：御殿下のところ。(⑫)なかなか、どこから入っていいかわからない感じで、裏の雰囲気になってるね。たまたま、図書館前の合格通り(⑩)で工事をしていて、仮設があって端っこに通路が来ているので、三四郎池が近くに感じられている。前は通りから遠く、実感がなかった。いま整備すれば人が行きそうに思うね。

一キャンパス周辺環境の整備問題

砂塚：北大のキャンパスに憧れて北海道に行きました。北大キャンパスは軸が強く、メインストリートに沿って学部の建物がくっついています。北大では、周辺のグリッド都市と軸をあわせて作り、市民が入りやすくなる動線を考えています。本郷キャンパスは、外部動線との関わりを考えていますか？

西村：東大に限らず、江戸の広大な大名屋敷が数多く公有化された。たとえば前田家の場合は、上屋敷を一括で公有化したので、周辺との関係よりは大きな敷地をどう使うかということを考えていたと思う。周りはすでに江戸時代に市街地ができあがっていた。北大が札幌の都市と大学を同時に作ったのと違うんだね。東京は高低差もできているし、中だけの論理でつくられてる。これだけ広い敷地をどう統一的に作るかというのに苦労したんじゃないかな。

今川：結果的には休日など、工学部広場などで周辺の方がこどもを連れて遊んでいる。

西村：これだけのオープンスペースがあれば

地元にとっては利用できるだろう。最初からどう考えたかという、本郷通りをはさんで東大側の軸と本郷5、6丁目側の道路パターンは全然関係ないからね。

正門から安田講堂へむかう軸をなぜとったかという、東下りの斜面に細かな尾根があって、どれだけ正門から距離がとれるかと考えて、一番スパンがとれるのがここだったということだと思う。北側はお雇い外国人の住宅だったが、北側に伸ばすときにどこだと一番引きが取れるか、と考えた。当時、最初は正門まわりに広場があって周辺にたてものがある、理科、法文、図書館があって、スクエアを囲む、という計画だった。■

キャンパス全体の計画から細々な空間までの話が聞けて大変勉強になりました。デザインや計画の中にある思想や考え方を読み解いていく中で、さらに多くのものが見えてきたのが非常に面白く感じました。(王)

(表紙に飾る写真の一部は東京帝国大学(1900)により引用)



▲ 図面を存分に使ってキャンパス計画を説明してくださいました



明治の技術を現世に語る産業革命遺産

Industrial Revolution Heritage which Talks about the Meiji era of Technology in this World

2015年7月5日、ユネスコ世界遺産委員会において、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼・造船・石炭産業」の世界遺産登録が決定されました。日本イコモス（国際記念物遺跡会議）国内委員会委員長でもあり、世界遺産登録に携わった西村先生にお話を伺いました。

世界遺産登録に至るまでの道のり、重ねる議論と実践

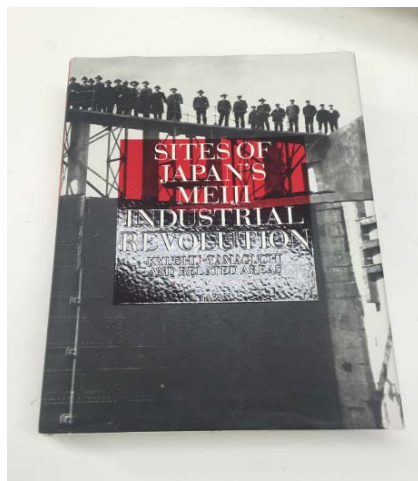
王：今回「明治日本の産業革命遺産」が新たに世界遺産登録となりましたが、世界遺産になるまでの努力というものはどんなもののでしょうか？また、我々「都市」という分野で学んでいる人にとって、どういう風に考え、関わればいいのでしょうか？

西村：今度の「明治日本の産業革命遺産」に関しては、初期の段階からもう10年以上関わっている。まず明治産業革命の遺跡などが世界遺産になりえるという思いがあって、議論を始めた。鹿児島県が中心となって一緒に議論を行い、その中で専門家の会議を立ち上げた。九州知事会のもとに専門家組織をおいて、各県から専門家にでもらい、どういう資産に可能性があるかということ議論する会を作って、それからずっとやり取りを続けていた。

さらに、日本だけではなくて、産業遺産というと、特に産業考古学の発祥の地であるイギリス、アジア太平洋地域で文化遺産の理論的研究と実践が進んでいるオーストラリアなどの先進国に参加してもらって、これらの人と日本の専門家と一緒に、実際に出てきたものの中で、どういうストーリーをつくって、世界遺産にするのかを考える。そのためにも、そのストーリーのもとにどういう候補の構成でいいのかを絞り込むことを10年以上やっていました。

ちょうど僕は文化庁の世界文化遺産特別委員会の委員長をやっているのだから、産業遺産はかなり特別な案件で八幡の新日鉄、大牟田の三井とか、三菱重工の長崎造船所のように大企業がもっているものが入っている。だから、これを文化財ではなくて、もう少し生きたものとして守れるような仕組みを作りたいというオーナーたちの願いがあり、内閣府の中に一応仕組みをつくったわけだ。僕は文化庁側の委員だったから、その議論からは少しだけ一線画してしまいましたが、話はずっと聞いていた。長いことやってきたからね。

これが当初ノミネーションの原本、これに関してほとんどの人は知らないけど、



▲ 明治産業革命遺産ノミネーションの原本

黒本：あまり公開されていない本ですか？

西村：そうだね、すごい綺麗でしょ、これくらいのものを作らなければならないから、やっぱり時間かかるわけで、マスコミの人も知らないし、国内だと本当に数少ない人しか知らない。

黒本：この編集も西村先生が担当しているんですか？

西村：このベースとなるストーリーを作るところは私も関わったが申請書の執筆作業自体はイギリスの方がやっていた。もう一冊厚いのがあって、これが本編で、一個一個の資産（全部で23ある）がちゃんと保存されていないといけないから、そのために、保存のための保存管理計画を作らなければならないよね、これがその保存管理計画。ここにあるのが日本語版だが、これを全部英語にしたバージョンもある。これはものすごく大変。

歴史のストーリーから織りなす世界遺産の物語、そして日本の技術力へ

黒本：ここまでして世界遺産に登録するというのは一番のメリットはどこにあるんですか？

西村：明治産業革命遺産の場合だと、もともと鹿児島の人たちが始めたけど、鹿児島には集成館という幕末の工場群があって、ここは日本の最初の工業コンビナートで、機械工場

とか、あとは製鉄、紡績など、部分的に残っていて、反射炉とかも遺跡として残っているわけだけど、そこはある意味で日本の産業の出発点なので、鹿児島の人たちはこれをなんとかしたいと思っていたわけ。

その頃の日本は海外からのインフォメーションが出島しかないで、オランダの本を訳して、そこに乗っている図や解説などを真似して機械とかを作っていたが、それで失敗を何回も重ねながら、やろうとしたわけ。のちに機械そのもの、例えば工作機械とかはイギリスから輸入したりしていたが、結局西洋の技術は非常に重要だと、みんな感じていた。

なぜかということ、やっぱり西洋の力が強いということはアヘン戦争をみてわかった。アヘン戦争が1840年から1842年で、それを見て、あんなすごい大国・清が負けることがあり得るということがわかった。日本もそうなると思った。特に南の藩というのは、大体船は全部南から来るので、そういう脅威に晒されているわけだからね。情報的にも長崎があり、出島があり、それから対馬は朝鮮に対して開いていたし、琉球もそうだし、外に対する窓が九州にあったわけだ。

産業力をつけないと、ここは産業というより国防だよ、大砲、それから軍艦、動力としての蒸気機関、あと動力源の石炭など、こういうものをちゃんと自前で賄えるようにしないと、日本は植民地になってしまうというすごく大きな危機感があった。幕府もやったけど、基本は各藩でそれぞれ努力するという風になっていたわけで、だから、西南の雄藩と言われている外様の藩には軍事技術志向が多かった。そういうところに知識が溜まっていったわけだ。

それまでの産業革命ということ、先進国の技術を他の国に移植して、先進国の人がきて、ここに工場を作って、そして人に教えて、そのヨーロッパの技術が広がったという風に歴史としてヨーロッパの人たちが考える。日本の場合、向こうから移植されたというよりも、いろんな情報を求めて自力でいろいろ工夫していた。もちろんそれだけでは結果は出ないので、欧米人たちに来てもらおうと思うんだけれども、作り上げていったのは地元の人たちだ。大工だったり、鍛冶屋だったり。だ



▲ 登録に至るまでは10年間の作業が積み上げられ、分厚い原本が出来上がった。その重みはそこにある歴史と文化に由来すると実感した。ちなみに、日本語と英語の二つのバージョンがあるらしい。



▲ 8月に都市デザイン研究室のM1が訪れた、熊本県三角西港の築堤（左）と排水路（右）。オランダ人技師ムルドルの指導のもと、港湾施設と付近の道路、水路までが1884年に建設された。日本で唯一、明治時代の港湾施設が完全に現存している。産業革命遺産は複合遺産で、北九州市八幡、大牟田市三池、長崎市、佐賀市三重津、熊本県三池、三角西港、鹿児島市集成館、萩市、岩手県釜石市、静岡県菰山からなる。

からそれは非常にユニークで、ヨーロッパと違う形の産業革命であって、ヨーロッパよりもすごい早いスピードで進んだ。50年間から60年間でヨーロッパに追いついたと言われている。それはヨーロッパにないわけだ。産業革命というと、200年位かかるんだけど、それを50年位で成し遂げた。

産業革命は、いくつかのものと地域の努力によって成り立っていた。最初は鹿児島だけだったが、集成館だけでなく、技術革命のようなことはほかでも起きていたわけだよ。蒸気機関の佐賀藩、船を作り始めた長崎だし、製鉄にしても、萩で実験的な反射炉が

でき、集成館ができ、菰山の反射炉で本当に鉄が生み出された。釜石で高炉のやり方へと変わり、当時は高炉の中に鉄鉱石と木炭を入れて熱するんだが、木炭が還元剤になって製鉄できるけど、木炭だと限りがあるので、今度は木炭ではなくて、八幡では石炭から作るコークスを使うことになった。やはり技術というのが日本の中でこうやって進化して、あるところで、経営的にも成り立つようになり、船の性能としても世界のレベルに達するというのが1910年位で、そこまでのストーリーを作り上げた。

黒本：そういった歴史ストーリーの仕立て

にしたほうが、より普遍的な価値などをいいやすかったりするということですか？

西村：そうだね、産業も造船、鉄鋼、石炭の三つに絞っていた。例えば、当初あった灯台は国防からちょっと外れるので構成要素から外すなど、そういう絞り込むこともやっていた。今回の産業革命遺産の場合は、日本の国防を巡るストーリーとして組み立てた。

今月号のマガジンでは、キャンパス計画から世界遺産に至るまで、たいへん興味深い話を詳しく聞かせていただきました。西村先生、お忙しい中ありがとうございました。（王）



コンペ特集 設計の志願兵たち

The Record of Challengers on Competitions



14 号館 1 階にて 造園学会コンペ優秀作品の展示

コンペ（設計競技）【Competition】

巷では、実にたくさんのコンペが開催される。提示された設計課題に対して、作品を制作して応募し、優秀な作品には賞が与えられる。

都市デザイン研究室からも、たびたびコンペ挑戦者が現れる。応募者は、課題を読み込み、時にはぶつかりながら議論を重ね、もしくは脳内で案を戦わせ、最適解をさぐる。図面を描き、ダイヤグラムを描き、模型を組み立て、作品をつくる。満を持して、もしくは後悔を抱えながら、作品を送る。あとは結果発表を待つ。

コンペは、まさに戦いである。どこまで考えを突き詰めるか、どこまで作品を作り込むか、自分との戦いである。同時に、賞をめぐって、他の挑戦者との戦いでもある。

この記事は、2015 年夏学期の間、果敢にもコンペに挑戦していった都市デザイン研究室生の戦いを讃え、後世に語りつぐものである。（編集：黒本）

2015 年 公益社団法人日本造園学会 90 周年記念全国大会

2105 年、公園のない / ある未来

Our Future With/Without Parks 2105



▲ コンペポスター（日本造園学会 HP より）

「未来の東京に、公園はあるのだろうか」

衝撃的なポスターに、目を惹かれた読者の方も多かったろう。1925 年に設立された日本造園学会が、設立 90 周年を記念して開催したコンペである。90 年後の 2105 年の東京における公園の未来像を考え、公園は存在するのか、あるならばどのような空間になるか、具体的な空間デザインを問うコンペである。

都市デザイン研究室からは、B4 生が個人で 2 作品、また M1 年代を中心とする 5 名グループによる 1 作品が応募された。

B4 生による 2 作品は偶然にも、ともに「墓地」をテーマとした作品に。M1 年代による作品は、公園のもつ目的に着目したものとなった。惜しくも入賞作はなかったが、90 年後という遥か遠い未来の都市を構想する、壮大な思考実験となった。

「百年後には公園は無くなる」

これは、20 世紀初頭、東京市公園課長として公園行政に辣腕を振った井下清（いのしたきよし）が書いたエッセイのタイトルだ。井下は日本の公園史に名を刻む、偉大なるランドスケープ・プロデューサーである。1928 年、東京の都市化が急速に進む中、東京市の公園課長となって 5 年、おそらく当時の日本で公園の創出に最も寄与していた人物だった。公園は本来、上下水道網等と並んで、都市の公衆衛生改善のための手段のひとつである。井下は、そうした公園の本来的な役割に着目しつつ、「公園は目的ではなく手段」との立場より、公衆衛生をはじめ、公園を必要とするような都市問題が解決すれば、自ずと公園は消滅すると思った。

▲ 主旨文（日本造園学会 HP より）

This is a not dystopia.

小林 里瑛 (B4)



"Contact site" has two functions. One is "Park of species preservation". The other is to mourn, like "Cemetery". The contemporary notion of 'park' will disappear, but the concept of 'park' will be inherited.

[illegible]

2015

2030

2050

2080

図1 都市景観デザインの進化のイメージ

2015年：都市景観デザインの基本的な構成要素（道路、建物、緑地）を示す。都市景観デザインの基本的な構成要素（道路、建物、緑地）を示す。

2030年：都市景観デザインの進化を示す。都市景観デザインの進化を示す。

2050年：都市景観デザインの進化を示す。都市景観デザインの進化を示す。

2080年：都市景観デザインの進化を示す。都市景観デザインの進化を示す。

首都の墓地

三文字 昌也 (B4)

結局、廃止された首都高など、都市更新の結果廃止されたインフラの再生として墓地があったらどうなるだろうと考えてみたのですが、風呂敷を適当に広げた結果、満足がゆく具体的な空間提案まで落とし込むことができず、ただ緻密なスケジューリングの重要性を噛みしめる結果となりました。反省しています。



都市のひとは、都市に還る。 *People living in the city will go back into the city finally.*

公園の未来は、この時代でも人間が普遍的に抱えるテーマの中に隠れているだろう。

781 981.

しかしそれでも、人間はいつか死んでいく。 *however, human are mortal at all*

現代以降、主に海軍専門官の資格として与えられた幹部官職は、その役割を果たした。 *Public posts which are created to promote welfare after the modern era, and their roles was*
 防衛需要に起因するが、必要に応じて「戦」を「治」に変え、国威を顕揚する軍事的役割 *and changes themselves into more universal ones: that removing*

新しい時代の都市は、従来の都市公園の機能を併せ持つ、憩いの場としての「公園」と「街」の融合体となるべきである。

そして、個性空間にも替わりは来る。2005年には人口が半減するメグロポリス・東京では、

It can generate enormous amount of "solid waste" inside of Tokyo.

凡の「死」を畏れし、「生」と絶がつかぬ苦しう道へも進んでいひ、

万々に世に大難あり。東京の御万りの村が事ようも。
 俵六郎の人の世に御万りの村が事ようも。

この結果、夏田といふ人達の成り立ちが明らかだ。

返ってくる時はもちろん、戻りながら戻って来ることが出来るシステムを構築するものである。

which enables us to go back into the city once again

TOKYO in 2105 2105年の東京



高齢化の予兆動向 Aging society	退老の予兆動向 Urban renewal	交通の発展動向 Transport revolution	低下しない所得のリスク Disaster risk	VRの進歩 VR innovation	死を助ける文化 Changing view of death
---------------------------	--------------------------	---------------------------------	------------------------------	------------------------	-----------------------------------

「おれは」が「おれ」の誤り	「おれは」が「おれ」の誤り	「おれは」が「おれ」の誤り	「おれは」が「おれ」の誤り	「おれは」が「おれ」の誤り	「おれは」が「おれ」の誤り
「おれは」が「おれ」の誤り	「おれは」が「おれ」の誤り	「おれは」が「おれ」の誤り	「おれは」が「おれ」の誤り	「おれは」が「おれ」の誤り	「おれは」が「おれ」の誤り

[illegible]

1. 題目：「臺灣與中國之關係」
2. 題目：「臺灣與中國之關係」
3. 題目：「臺灣與中國之關係」

about death and cemeteries 死と墓をめぐる問題

雑誌『東洋』(1911年)の表紙。右側には「東洋」の文字が縦書きで入っている。

4,500人/年(2010)→7,000人/年(2030)


 無類編 (寛文拾) 巻6 野村胡堂 (1732) → 野村胡堂 (1732) 巻6 野村胡堂 (1732)

[illegible][illegible]

再び、大地と共に生きる。

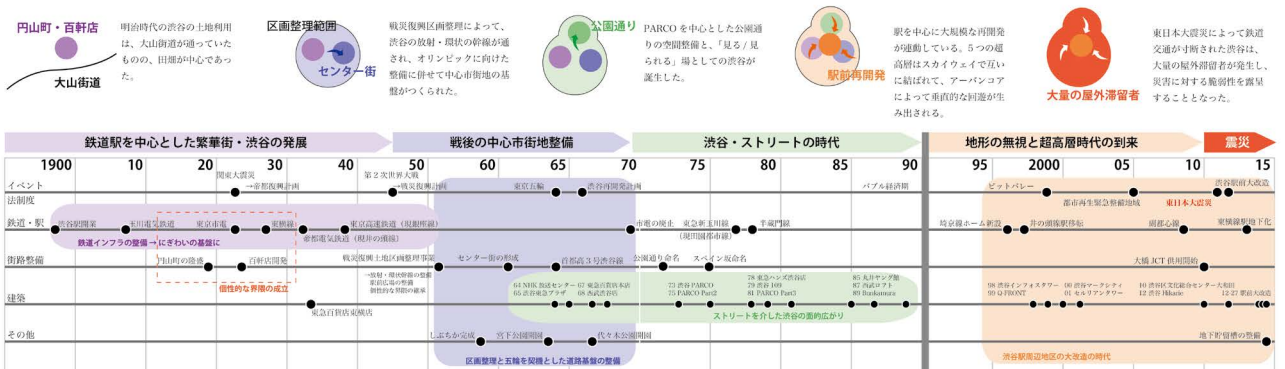
中島（健）(M2)、渋谷 (M1)、窪田特任教授、遠藤准教授（工学院大学）

今回のコンペでは、50 年前に遡ってリセットして、現在あるべき「もう一つのまち・もう一つの建築」を構想することが求められました。

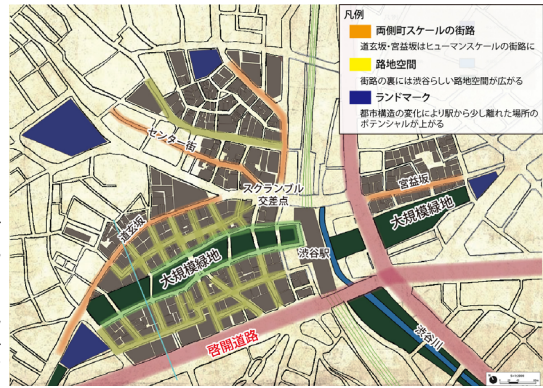
渋谷については、学部 4 年時より継続して関わってきた地域であり、特徴的なスリパチ地形や歴史についてはよく理解しているつもりでしたが、もう一度 50 年間の歴史を振り返ることで、繁華街・渋谷の発展の道筋と現在の駅前街区を中心とする再開発に存在する文脈の違いが明確になりました。また、調査の中で渋谷の地形を活かした戦災復興区画整理についても知ることができ、大変興奮したことをよく覚えています。

提案では、渋谷の地形に即した界限・ストリートを尊重した一連の空間計画により、災害に対しても頑健な都市構造へと変容させることを目論みました。ここで言う「界限・ストリートを尊重した空間計画」は、渋谷の発展の歴史から見いだされるものです。プロジェクトでは、災害に対して「生き延びる」ことのできる都市を模索しているのですが、今回過去に遡ることで、微かですがそのヒントを掴めたような気がしています。（中島）

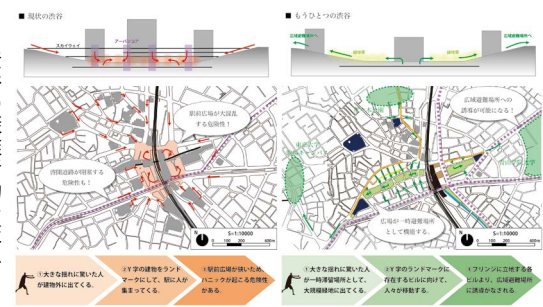
▼ 渋谷の都市構造にも時代ごとの特徴が見て取れる



▶ ヒカリエとマークシティがある場所が、大規模なオフィススペースになるプラン



▶ 渋谷の避難行動を変えよう
都市空間とは何かを構想した



広島県廿日市市主催

宮島口 まちづくり国際コンペ



▲ HP トップページ のロゴ（宮島口まちづくり国際コンペ HP より）

年間 400 万人の観光客が訪れる世界遺産・宮島。その玄関口にあたる廿日市市宮島口は交通結節点としてほとんどの宮島訪問客が通行するが、景観は宮島の玄関口にふさわしくなく、素通りする客が多く、また繁忙期には混雑が発生する。こういった課題を克服するために、陸地を約 1ha 拡張する埋め立て工事が計画されている。これに合わせ、宮島口における問題を解決し、魅力を増進するような都市デザインのアイデアを募集するコンペである。

結果発表を控えているため作品の公開はできないが、都市デザイン研究室の学生 3 名と建築家 1 名のグループ、また都市デザイン研究室の助教を含む、地域デザイン研究室を中心としたグループが応募した。

Information

8月のウェブ記事

夜のまちを彩る、帯のまち流し
神田で日々インタビュー中

是非ご覧下さい：<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>

9月の予定

9月4日～6日 建築学会大会
9月14日～16日 20世紀都市遺産PJ 松本現地調査
9月24日 講義・2年演習スタート

編集後記

黒本 剛史

最近8月だというのにすっかり涼しくなりました。このまま夏も終わりなのでしょうか。皆さん、夏はいかが過ごされたでしょうか。夏の一番の思い出は、山口県で2週間開かれたボーイスカウトの世界大会で、サイト全体のゴミ管理を任されたことです。世界中から4万人が500haくらいの土地に集まって生活します。都市が一瞬で生まれ、営み、撤退します。20箇所あるごみステーションの建設管理、収集業者との交渉、各場所の運営者に分別を依頼するなどしました。汚水があふれたとなれば部総出で現場に急行し、夜中に土のうを積むこともありました。こうして、都市の静脈を支えるインフラを管理する地道さ、苦勞の一端を学ぶことができました。



URBANDESIGN
LABORATORY